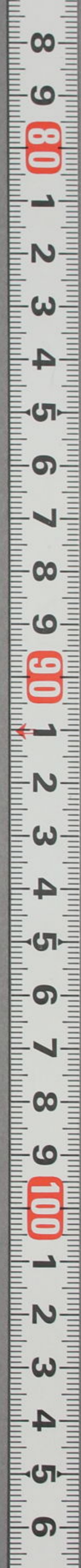




特別
□10
3476
1



この國意考版中の文字の誤脱多を以て言意を以て書之難き
所々の誤脱今之を訂正すべくして今之を訂正すべくして今之を訂正すべくして
訂しもし且補ひもあつたり叶を明治二十六年の秋

算根の直し

三芳堂校核ノ辨奇ノ凡例



國意考

加茂真淵述

。世々の世々

あれ人の我ハうやうのちいさきこととんん
一侍りぞその中を治りむとてんん玉の道に
しそしんんおうれさうが笑てんんおは小まて
人ふあひぬんんおはしんんおはしんんおはしんん
わいいておはせしんんおはしんんおはしんん
そこのいんんおはしんんおはしんんおはしんん
地のうろ成おはしんんおはしんんおはしんん
しそあもしんんおはしんんおはしんんおはしんん

ちひさしき人よ、あつたはれいさしきれ中
はるほつたわいなや、あつたはれいさしきれ中
周が、あつたはれいさしきれ中、あつたはれいさしきれ中
あつたはれいさしきれ中、あつたはれいさしきれ中
あつたはれいさしきれ中、あつたはれいさしきれ中
あつたはれいさしきれ中、あつたはれいさしきれ中
あつたはれいさしきれ中、あつたはれいさしきれ中
あつたはれいさしきれ中、あつたはれいさしきれ中
あつたはれいさしきれ中、あつたはれいさしきれ中
あつたはれいさしきれ中、あつたはれいさしきれ中

あつたはれいさしきれ中、あつたはれいさしきれ中
あつたはれいさしきれ中、あつたはれいさしきれ中
あつたはれいさしきれ中、あつたはれいさしきれ中
あつたはれいさしきれ中、あつたはれいさしきれ中
あつたはれいさしきれ中、あつたはれいさしきれ中
あつたはれいさしきれ中、あつたはれいさしきれ中
あつたはれいさしきれ中、あつたはれいさしきれ中
あつたはれいさしきれ中、あつたはれいさしきれ中
あつたはれいさしきれ中、あつたはれいさしきれ中
あつたはれいさしきれ中、あつたはれいさしきれ中

いづれ封じざる人なりむ。舜のほを禹よりよけ又い
ころ人として、をさむよなりしは、さうの舜の民
少て、禹の父なる小な封じざる人なりむや。其いづ
孟子も、今の世より勸化のいささからならむ。
す。殷の世いらしむ。小や。其始は、人として
禹の世を、隠しは、さう。さうお、さうつさうたど
や。よさ人小ほささるん。あまたさひなき封じや
らん。さう人いづれさう。さうむよれ小、隠し
惟上つ代一代二代や。さうとやらぬさうなるは、
さう周の文王とや。さういづれさう。さうたど

ようせむ、父のさうとむとあぐれ封王のさうと
小うて中く小人をなうけさうせしむ。さうや。
民王の時、封じらるしとさうあさうさう。さう人
いづれ伯夷、叔齊がいづれさうを孔子いづれ
さうさ人いづれさう。さうさ武王さういづれ
ん。さう小義なりむ。封の後をさうとさう。さう
韓かさくは、さうさう。さうさう。さうさう。さう
小、ゆばさう。

○さう周公、政をさうして、殷の徳を四十餘、さう
さう。さうさう。さうさう。さうさう。さうさう。

人はあゝむ。周公よあゝなすまふよあいてほろば
 せしときざし。かゝるをよめしにのち。これ
 さうえい。八百年とひいど。初二代も。十年とひ
 り。治まるといふん。やがていと死てな。うゝか
 りふまき。其四十年とひの。固としてよめ人の
 ふよこしませも。外へまゝうゝる。その中の
 らうれ。廿の中。れもふも。い。よ。た。よ。た。よ。た。よ。た。
 よこしまか。内に。の。れ。の。の。の。の。の。の。
 なる。さ。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。
 きの。

○これより、のらの、藤の、文帝、のいひ、時、
 治まるといふ。このいひ、や、ま、ひ、とて
 天をさへし、帝、その人、の、
 をして、^{シタ}、の、の、四方の、を
 いえびと、とひて、や、う、の、
 きて、唐國の、の、なれる、の、
^突、この、の、の、の、
 つづ、の、の、の、
 ら、の、の、の、
 傷、の、道ありとて、天、
 の、^{ナキ}、解ぬ、を、
 田

○まよりのち、終ふわびげなくも、とびつとて
島へちりらしたるまゝぬぬ。是もまぶりのゆゑ
のわびてようなきことなり。或人の佛の心を
ころしとてひとの心のおろふなりけなれば、
君い天の下の人のおろふなきことばさうとて
ちぬものふてけくさうに佛のこころいふたなふ
ことごとひはけしぬなり。

○凡世の中にあつ山。荒世の有ら自ら道の
出まらぬことごとく。さへも自ら神代の道のひらき
ておのづから。國よほまらぬ道のさうとてい
望

いよしくさうえまさんものさ。くそく儒の道こ
そ其國をさうとてのちまへをさうくがけけりぬ。
然るそよおの心をまへておもてはつていふ
かの道さのさまら。天が下治ることをとれま
かぎ

○さておの人の心をさうものさ。いふまゝもさぬ
母のさめよおなまふ似れど。是とよへある
後いさもせんよとておのづからさうなり。孔子
てい人も待と推して。巻の上ふ出せとてい
かよさるんたる。凡おの程ふさとのさうい

○或人のまじしけ國よりおつらうかむと妻
とて多け物とほごかりしと。唐玉の通る
て。さうさうもむしけるさうさう。さう儒ふりり
よくなぬと。おのれをすて。大ふ笑へるを
おのの人の。唐よりほご姓とめららざりて
ありけるを。おのの母と軒せしむるに
おのの。只さる空のありし。のさうさうの
さうさうありきむ。さうさうさうさうは姓と
らざり。いさうさうさうさうさうさうさう
さうて。さうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさう。さうさうさうさうさうさう。隠してさうさう
さうさう。御玉のいさうさうのほごさうさうと。徳の
兄弟とけり。母さうさうさうさうさうさうさう
物ハさうさうさうさうさうさうさうさうさう。さう代ふ
ハ。年々さうさうさうさうさう。儒のさうさうさうさう
さうさう。さうさうさうさうさうさうさうさう。さう
は姓とけり。さうさうさうさうさうさうさうさうさう
とて。代ふ。小位と人な棄たれ。このいさうさうさう
は方の玉さうさうさうさうさうさうさうさう。天が
下ハ。さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

ひちりぬおろしなるるろふ。聞と崇むて人身
とんとせしよ。しつとたぬこたなり。

○又人と畜獸とをいふ。人の才を我
ばちよひて命をあたはるものよ。やう商人の
くせなり。世の徳とさびとをいふ。しりて
てこの徳のぬきぬき。凡天地の徳よ生と
し。生るものいふ。おまなうとてや。その中
人のいふでましく人のいふ^{たむ}とあるもや。唐
ふてい。物の靈とつひて。いと人をまきりて。た
のれがたりしよ。人のいふ物のあしきものいふ^その

しよとていふ。ふとなれむ。天地日月のかくしぬ
や。ふきも獸も魚も草木も。右のてくかきしる
いかなし。是なるまじひよあるてふ。このあつて。たの
が用ひゆるよう。たづひのたよとましくのあし
さぬの出来て。終ふ世をいふ。あぬ。又ほある
がうらふまじつた。まあざむきをなげきし。
もし。まじつたよ。一人二人物。いふ。さうむ時
よ。さうあるまじさ。人皆智あれが。いつたか。とも
あひうらとかうて。終ふ用なきなり。今も獸の
目より。人こそ。さうなれ。さうふ似る。さうなれ。

しどしどぬるまじとのなる。されが人のさしを
いと。足牙よりふらむ。其るとおよまるとさる
天地よそむけらものなる。よよくさるるを
をもののねほさを。

○又云。其もどもはよよ文字なり。唐の字と申
てあつそれとて知るべし。答。まづ唐の國の
つらましくあしとせのほらぬいんあさ
かり。こやうつたささるいんあさ
字ぬけり。今按。その人の用ある字のみと舉
し。いんあさとてさる。之類八千とやむけり。碑

苑の一も其受取葉樹葉其外十やうの字かく
ていたし。まゝ其の玉所の名何の草木の
名まどいひて。およよの字ありて。およよ用ぬる
かく多の字と。まをほらむる人もさる。其約論ふらむるも
或ハ誤り。或ハ代ふ。其約ふらむるも
さる。わがらむ。其を天竺の五十字とて。
五子餘卷の佛の徳と書傳つ。たゞ五十字
字とがよきま。古しく今と限らふ。其詞もさる
ま。傳つられ傳るを。字のさる。五十の聲ハ天
地のさる。其内ふらむ。その

よりだ—さつのはら—して、神代のことをも
かりのた—さつを下さる、昔、神世の昔のこと
と、言人多きさう、そと昔、昔よ、つきて、心保
く、神代のこと、目の前、ふさふさ、つて、いひて、目
つらふ、人のこころ、これ、おきて、ぬさふ、さう、な
せう、いふ、や、おひ、人、の、い、ふ、—て、さ、い、ま、を、や
さも、こ、さ、ふ、さ、ふ、—と、よ、く、知、つ、ら、む、し、た、ら、ひ、て、
そ、も、さ、つ、お、け、る、物、ふ、ど、を、え、ん、ず、も、の、こ、ろ、ふ、ち、の
こ、ハ、—つ、も、知、つ、ら、む、也、お、ひ、と、古、の、人、の、代
を、さ、し、で、い、の、こ、ろ、て、神、代、の、こ、ろ、を、知、つ、こ、も

の、こ、ろ、こ、い、の、唐、の、文、と、い、て、こ、ろ、—と、い、て、それ、が
下、も、さ、昔、宋、と、入、代、あり、て、い、と、く、せ、さ、さ、儒、の
道、と、い、て、—と、知、つ、ら、む、と、い、ひ、つ、の、も、ろ、を、さ、ら
や、さ、て、い、さ、こ、ろ、こ、の、神、代、の、こ、ろ、を、い、は、し、た、ら
も、の、せ、け、つ、さ、ら、あ、ふ、つ、ら、よ、又、さ、ぬ、人、の、こ、ろ、こ
そ、と、お、ひ、ふ、さ、が、し、と、や、ま、の、文、唐、の、文、と、い、れ
る、人、の、お、ひ、い、さ、く、さ、ら、さ、ら、知、つ、て、矣、と、い、し、こ、も
—と、い、ふ、こ、ろ、こ、ろ、上、は、代、よ、い、竹、の、こ、ろ、の、こ、ろ、
昔、後、よ、人、の、ほ、ら、う、—と、い、ふ、も、な、れ、む、さ、ら、ふ、も、
能、く、つ、ら、む、こ、ろ、こ、ろ、あ、ら、ふ、人、の、こ、ろ、も、て、能、く

せきくをりくしんじつにさるる夜は朝よめて夕にされ
 ゆくもせなる。我玉の心。一とせぬに世に。一とせぬに
 天地を随て。とくらむに日月も後の星も。よその
 一とせぬに日月も。今も。一とせぬに星の月日
 とねる。一とせぬに。されば天は日月星の心。一と
 傳へる。心は。は。一とせぬに日月も後の星も。心。一と
 より傳へて。心。一とせぬに。世の中平ら。心。一とせぬに。心。一と
 する。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一と
 中に傳へる。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一と
 神代の心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一と

右の心付と急。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一と

○或人け玉の心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一と
 する。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一と
 だ。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一と
 差。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一と
 つの。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一と
 天。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一と
 其。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一と
 なり。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一とせぬに。心。一と

天地のりは丸く漸ふして遠くと唐人の言の
ごとくはしむる言ふはさふらあつては夏より
急よあつてはしむる言ふはさふらあつては夏より
小信屋也。ようて人のあつてはさふらあつては夏より
とてはしむる言ふはさふらあつては夏より
天地のなほ春夏秋冬の漸なるふ背けるを也。
天地の中のはななる人いづくて天地の急よりせま
りてはしむる言ふはさふらあつては夏より
ふりかの時のはしむる言ふはさふらあつては夏より
も遅うしむる言ふはさふらあつては夏より

ハ後じ、それを人としてふよ仁義礼智
など名付るゆきよとてせむるやうよか
ぬぞうし、たゞさる名もなきて、天地の心
の中へなるそよはれ、さるあよははまハ久し
く後をよきとせむるや、目のあよははまハ久し
たるとそのたりのひせやあつてとこ人の心
ハ言ふはしむる言ふはさふらあつては夏より
べのよめよはれいよん

○唐國の學びハ、始人の心りて、能きること
のなむる言ふはさふらあつては夏より

象とて一即國の右一の道の天地の中ふく
 丸く平らふして人の心符よいほくし
 びくけむむ後の人知えくくくされば古
 の道皆終るふやとりふべけれど天地の終
 め限りいふ中いふなし。其をいつちさきこ
 唐の通ふようてかくぬきくるむのつとや天
 地の長さよりたりむ五百年ふ年まきこ
 地の數はしるぬきくるむ。こせづく人の心
 一と心あふくく敷くは信くん。凡天地
 のまよく日月を知ておのづく有物も



皆丸し。是をまのよのまよたよそのま
 ちある葉よ玉時ハきくびいてこなる形となれ
 ど又卒らりたるよよくくまは丸と丸と
 にかへるが如く必しもあつてはかへるべし
 ごとくされば世を治りたるもは丸とまよ
 しくしてこそ治るべけれどよよせりくはし
 さハ治るぬと唐の世をきくべしかくて天
 地の心なればさる時よなるふくくなく
 びくくせむ人の心としていそぐらく
 唐人の上なる人の威を
 唐本別項トス又此間教行アリ
 ちのまよとまよとくくよろきけちんを

あやふさふさな心——
に威をたふさすものぬき道の子は——
——
甲國には道とて——
とあやふさふさの心の上のあやふさふさな心——
——
まよふ心——
こが——ぬきかければ公易——
卒らうとせう。きんときあそこのころ——
宮殿衣振とて——
宮女衣花とわらう。あやふさふさ

あやふさふさな心——
ようあやふさふさな心——
らド。まよふ心——
——
いふ。命を——
のとも——有るばる——
さの勢及ぶもの——
心の移るもの——
——
のころとて——

皆侍るべし。

○たゞを國の天地のなりたまふべし。古より
なす事なむべし。板のやね木の垣のあとの
の衣。思ふ巻た大カとやうにして。まじりたる御
まじりたる夫と携タテマして。撫タテマたる御タテマなるべし。
なごらむべし。御人の心タテマなるべし。
はきさるるをぬむとの心。唐人のさめとタテマて
せし頃より。多に宮殿衣服をのふタテマなり。成
て。上の女タテマしきもよき。心タテマにおろふ。女タテマなり。
たぬし。心タテマふあむ。て。上の位をさのタテマまら

了。ご後よき事た中人も。上ハ御方の心も。て。
御心いし。下も。後ぞ古ハの上のごく。ぬて。
唐のごく名を。上を釋タテマする。て。せぬ。も。
よ。あれとも。き。く。ぬ。さ。は。は。ま。て。
や。ほ。ふ。や。と。え。よ。き。古タテマは。後タテマの。後タテマは。な。
ま。せ。れ。り。て。其タテマ名タテマの。傳タテマる。の。ま。な。り。是。の。の。
后タテマと。ま。て。人タテマの。國タテマは。な。ら。ひ。の。あ。や。ま。ら。し。う。
な。れ。る。も。也。或。人タテマ問タテマさ。る。古タテマハ。皆。あ。ら。ま。
人タテマの。ま。じ。り。の。心タテマも。さ。る。も。答。は。問。の。ま。じ。り。
直タテマに。ま。じ。り。の。心タテマも。さ。る。も。凡。心タテマの。直タテマは。ま。じ。り。

しふにど。たしをもし。てんいらくく。まに必世の
 新いろがぬし。何姓をよらんとせん。くむをよし
 し。はまのいでは。はるハ見牙おぬ。てん。黙よ。ぬしと
 とく。天のふよつ。つ。も。獣よ。な。く。し。く。や。
 生し。も。もの。に。皆。は。ど。く。也。皆。く。制。を。ま。ん
 人。な。れ。ば。女。制。も。は。ま。な。ら。ん。地。よ。う。し。て。め。ん。い
 し。の。草。木。も。獸。も。く。ぬ。ら。ぬ。し。お。も。は。女。の
 言。ま。は。して。ま。ま。の。制。ハ。天。地。の。父母。の。教。也。け。國
 の。く。し。の。さ。し。の。し。を。と。え。ん。く。し。も。母。を。が。ん
 け。し。も。さ。し。の。く。し。て。く。し。人。情。の。ま。ら。れ。ど。ら。ん。け。

通ぜし。く。は。お。く。て。も。母。見。牙。の。通。ぜ。し。ハ。た
 ぶ。多。く。し。も。ま。し。く。は。ら。ん。の。通。ぜ。し。と。お。り。た
 は。く。せ。し。也。物。の。な。を。ら。く。を。見。牙。姉。妹。お。ま
 て。人。に。あ。ま。を。し。さ。し。の。く。し。も。人。の。せ。と。あ。つ。て
 お。の。ば。く。し。ば。ら。ん。の。制。ハ。有。し。ざ。く。し。に。は。獸。よ
 り。く。し。も。く。し。て。は。姓。を。よ。ら。んと。さ。ん。の。國。の。古。く。の
 母。と。射。し。たる。と。さ。く。さ。る。も。ま。し。く。も。又。よ。か
 せ。く。を。わ。り。く。し。も。隠。し。て。く。し。の。く。し。の。せ。し。と。さ。ら
 む。ふ。し。一。反。制。を。ま。ま。な。ら。ん。必。天。が。下。の。人。後。の。せ。と
 ち。く。め。の。と。わ。り。く。し。も。お。ろ。く。な。ら。ん。さ。し。の。く。し。も。女。は。姓

おうそぬおもしろいなどかぐつバアを裁せんりの
君を裁し父をころと割ハ破ヤギては姓めとらぬと
てづねとおりのいぬ何なる愚昧や凡天ツト
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
傳くいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
くら人のいぬくちうも動ぬ世の百年あつむ
よりいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬ
よきこれけ天地のえ一死よむていふ年も
百年も一瞬いぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬ
あしとも丸くしてこそよきこれかたなること

ハ益なり

○佛の道て人を導いてよき人とせし
これいふこといふこといふこといふこと
さそむるをいふこといふこといふこといふこと
よひくもて佛をいふこといふこといふこと
もとえぞいふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこといふこと
佛の尊厳よ教なるやさてむらひふじらふこと
と多くの人なることいふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこといふこと

殺らぬとてやうく極まらうて。保も
程も上げざる事。

○まねくふの極をきらうて世の治るる事よ
つきて。或人云。今もなほ室の法まのびにきて
軍あれし。おもれえ師とまむ。又はみぬ
道とえぐる者思くらく。おもれやれよし。一方と
防ごうふるはよれものをも。まむひて殺し
てむし。これを世の治るるのありし。と。おのれら
あつらひ。人のこころをまむぬものなう。まむ
うられらるるを。う。又よ。十八年よ生れて。さ。さるる

もかゝるよ。いた平よ。う。う。さる。は。よ。か。て。の
こ。や。い。有。ぶ。さ。古。く。お。お。や。く。の。事。を。な。り。ひ
め。あ。い。む。お。な。り。お。む。を。今。い。よ。せ
んと。お。ひ。て。お。ぬ。さ。あ。む。を。し。て。命。を。終
る。の。な。う。ふ。の。内。よ。う。い。あ。れ。ど。時。の。い。ま
ふ。ひ。よ。ま。む。ひ。て。さ。い。の。い。ま。け。い。と。ま
ね。ぶ。人。の。さ。う。の。い。ま。で。世。の。死。よ。う。と。あ。い。ど
死。う。い。の。あ。い。ど。一人。二人。い。ま。の。あ。い。せ
ん。も。世。の。中。ふ。陸。に。い。今日。も。あ。い。け。ま。だ
せ。む。い。な。い。と。い。ま。も。あ。い。と。い。ま。う。ぬ。人

後の人その司とされば其きを示さんとし威を示さんとし
威と示さんのは武威なり外に其をどうが其きを示さんとい
ふ如く已らしたる司を下を志たしよてたてたるにて
とを教へ助かる様にする時を下の人の威を馳りたるは
其もその又司とすべし下の人は皆さかきりたるにて
必し其思なる也この下とすも人々さかきりたるが如き
ものありたれども其の中より下とすべしとおろやけの道
をこそその心をも知りたれどもさかきりたるをばさかきり
わけてさかきりたる心をもさかきりたるのわらわらも志
するれ上なる者いとの心は終るはさかきりたるなりて下なる者
言はしは其心なりを種しむるなりてさかきりたる腹はあきりたる
をさかきりたる心なりてさかきりたる心なりてさかきりたる心なり
もだれねさかきりたる心なりてさかきりたる心なりてさかきりたる心なり
福の枝直さかきりたる心なりてさかきりたる心なりてさかきりたる心なり
は休するなりてさかきりたる心なりてさかきりたる心なりてさかきりたる心なり
いりあかきりたる心なりてさかきりたる心なりてさかきりたる心なり
すあきりたる心なりてさかきりたる心なりてさかきりたる心なり
合ました右の心なりてさかきりたる心なりてさかきりたる心なり
かきりたる心なりてさかきりたる心なりてさかきりたる心なり
かきりたる心なりてさかきりたる心なりてさかきりたる心なり

るよりいかにせよあはれしむるをもちしよとて
いふなれども是もさるる也。さるるよりいかに
てをいふが、**やい**しとらんる。凡人の心に私あか
物として人と奉ひ、**知**るをりて、**事**をかつを、**け**の
の心を、**時**に、**知**るの上を、**私**の**心**を、**用**る、**世**
後り人、**静**也。是もたより、**世**の**心**、**後**りあつ
り、**教**を、**知**る、**世**の**心**、**後**りあつ、**世**
らる人、**心**、**後**りあつ、**世**の**心**、**後**りあつ、**世**
こむ、**世**の**心**、**後**りあつ、**世**の**心**、**後**りあつ、**世**
有る、**世**の**心**、**後**りあつ、**世**の**心**、**後**りあつ、**世**

かく、**誰**うはとまらん、**け**事、**い**とら、**こ**の**心**、**後**りあつ、**世**
あり、**世**の**心**、**後**りあつ、**世**の**心**、**後**りあつ、**世**
くせ、**世**の**心**、**後**りあつ、**世**の**心**、**後**りあつ、**世**
く、**世**の**心**、**後**りあつ、**世**の**心**、**後**りあつ、**世**
心、**世**の**心**、**後**りあつ、**世**の**心**、**後**りあつ、**世**
よう、**世**の**心**、**後**りあつ、**世**の**心**、**後**りあつ、**世**
む、**世**の**心**、**後**りあつ、**世**の**心**、**後**りあつ、**世**
む、**世**の**心**、**後**りあつ、**世**の**心**、**後**りあつ、**世**
あらん、**世**の**心**、**後**りあつ、**世**の**心**、**後**りあつ、**世**

皆^レ也^レ （以下行年三九）
おのまごし。上の一人の心を世にうつし物よご
ある。命^をうけたる軍ごんい^も （その大なる心ゆ） （いんぎの）
ア^レ （以下行年三九）
〜何事も〜はんのかん記よ〜

○讀加茂真淵國意考

真淵之言蓋謂我 國上古俗淳人樸自然而治上
恬下熙逮至儒教東漸而鑿混沌牖聰明離淳去樸
古風漸斲美其冠服壯其宮室君尊於上臣擅於下
智術益盛俗日趨^{ワレ}醜^{ハキ}卒至^ニ乱^ニ逆^ニ相^レ繼^テ 王室遂衰矣
是儒學之害甚於^レ叔氏也又謂上古言語簡約情性
純一發諸吟詠直而不俚後世傳習文字乃有假名
筆翰盛行人習異言世移俗換言語大變^レ 上世之言
母^レ繇^レ可^レ繹^レ獨有歌詠存焉古言賴焉以傳於今耳真
淵素學古歌而通古言研精潭思至老弗衰其治古

言也能發明千載不傳之義，詳叙選述以訓學者，其有_レ功乎。國籍益不淺歟，嘗與友人讚美論之，頃又讀其所著服其用心之勤，而奇其所見大異乎世。人矣，蓋真淵亦興起於我，護園復古之教者，歟。其從事，國籍博讀古書，尋究古言，推以觀古所以其見之，超出於世也。惜乎其不能潛心於聖人之道，而獨見我。國上古淳素，因循之治，與彼老聃無為自然之道相似也。以為異域同揆，治國之道莫善焉。皇祚之長久，勝乎萬國者，以此道已於是。貶譏儒道為小，為偽，歷詆羣聖，無所忌憚也。真淵動曰：直々所謂

直者，直情徑行之直，乃我狄之道也。其不知聖人之道，於是亦可以見焉。又有同母為兄弟，異母則姊妹，姦通毋禁之說，此則禽獸知母而不知父之類也。非人道矣。以此為國美事，甚矣其惑也。不直同人道於禽獸也。乃至謂唯人有智，故惡禽獸，无智勝於人為甚矣乎。其言之也。又謂四方諸國有字，不過數十，足以成用矣。唯彼華字至以萬計，多文難記，煩雜無用，因極口貶譏聖人之國，而論其虛文惑人邪智，用盛夫。四方諸國無有文字，若夫梵字、滿文之比者，直以音為用而已，非有義訓矣。唯聖人之國作為文字，

記載名教皆有義訓矣君子之言用此成文所以行遠也此華夏之所以為華夏也禮樂之於治國也文字之於傳道也非聖人之國孰能與為此非真淵之所能知也宜乎其言之乖戾一至於斯矣凡天地之間華文之所通行不過十數國其餘橫行書不同文如我國與華隣風土相如人物相如故假彼字達我志乃其宜也安万侶之記古事也舍人王之紀歷朝也莫不然矣即使真淵而不讀華書不假華語則必不能有著作矣今讀真淵之書雖假名以行亦皆本由華語以達其志者也不然則又安得立言行世

焉乎今反譏華文以為無用譬諸奪人劍賊其人毀其劍謂無用豈不大罪矣乎嗚呼無為自然之道老聃之言莫以尚焉莊列之書詳之又詳其言盡矣其道可以救衰世矣亦聖人之所不棄也真淵之論乃得其一端者也今以此論我上古之治則似矣夫真淵頗讀聖人之書而能興起於復古之教用諸國籍焉能發明古之言不亦豪傑之士哉抑生其國必為斯國揚美隱惡禮也君子之心孰不然矣然欲揚其美顧顯其惡陷於禽獸而自謂得之不智莫甚焉且襲人故智立己意見貶譏聖人輕侮華夏倍其所

しひこつしづきとるもどもち。ついで是とちをせり。
海量いゑより親鸞おんの教を奉どふ程のもの。一
あれど、いふやふが神カミ隨たがなる國の大道をまへん
や。あしむらん。お徳のいふをまへぶよ。こそあ
まむ。さきづきまゆら。後もおとど。人と備破して
徹とほるも。いふも。そののちも。あま。予いさく。あま
はし。やさんとたり。そとく。我が加茂大人。実
ふ千景の一人。うして。末学。於て。千景の學を復
古せられたるふ。あま。うして。後。のまを加へん。たれ
ども。今よりして。ある時。あま。いふ事。と。う。たれ

うして。ゆき。と。い。ふ。事。い。お。は。し。殊。の。系。
神皇祖カミスメロキの大道を滿みるよ。うして。い。や。の。澤。を。と。
清キヨく。も。ね。も。と。其。真。と。は。い。ま。さ。の。事。と。く。ね。り。と。
は。考。中。よ。天。地。の。心。と。い。い。人。と。ま。と。り。入。れ。る。我
が。道。の。と。い。ふ。あ。い。は。ま。の。れ。ど。も。ま。ら。の。事。は。あ。ま。
所。本。居。の。鈴。屋。大。人。は。ま。び。ら。う。の。お。書。の。辨。明。し。て。
あ。い。く。と。さ。れ。と。ま。い。ま。い。ま。い。ま。い。ま。い。ま。い。ま。い。ま。い。
た。い。は。古。學。の。程。を。ま。せ。られたる。ふ。の。大。切。と。ね。り。と。
づ。き。な。し。と。ま。づ。て。加。茂。大。人。の。ま。な。し。は。あ。ま。い。は。し。め。
を。ひ。く。人。の。後。と。も。あ。ま。い。な。る。もの。と。い。ふ。それ。を

此論者の難破したるをいふ、あはれなる事もなほ
もあはれど、大切を以て、後いづこも事、
右今の左例なり。け故に加茂大人の爲に、偏安を
事したのどし。

蓋真淵亦興起云々

け云い論者よ、いづれ、儒者の左云しして、是又
竹もいよと事ハ、皆聖人より起るるといふ
事く、そし、古学の第一たるものち、万葉集、
万葉の右云と、能学ては、古事記、其外の神典、國
史よりくる、万葉とよくいふ、いづれ、小聖、人、流、の、邦

智をいふれて、神、隨、なる、意、を、求、ふ、る、る、
教千葉、心を、深、む、ふ、の、漢、意、と、も、れ、ざ、れ、ど、
系が神國の道の、始、ま、り、る、る、る、る、る、る、る、る、
の右云と、後、世、の、注、書、小、し、げ、古、事、を、以、て、
事と、い、は、り、て、記、さ、る、人、ハ、僧、契、沖、く、契、沖、ハ、氏、ハ
なごし、や、ま、し、是、志、劇、大、人、の、な、づ、く、所
あれど、い、づ、後、園、と、い、は、る、ん、ま、し、
糸、道、ハ、そ、の、後、園、と、い、は、る、ん、ま、し、
事を求むる事、佛、家、ノ、煩、悩、と、い、は、る、善、提、を
求むる事、上、の、事、を、な、ん、が、後、園、の、力、は、よ

らんや、を彼學流の性理學よ、天無心也、鬼神氣也、祭則致我誠のこゝを破する事、亦が古學よ、後世の神學を破するとおぼしきこと、其後固學よ、心ありとする天、靈ありとする神、もして聖人の寓言として、亦通ふ神といふものといふたは、聖人の神といひ、天といふもの、道なきを殺して、玉と奪ふ時など、天命などいひて、民を欺く、心は、けうかすたるものなれば、其ハ性理家よ、天と無心と、鬼神と氣と、も虚なり、まづ、これを破し、卿など、本邦の神とや、を、それと、同じしやうい

はもひて、四事本紀の序ふ、竊觀諸其為邦也、天祖、祖天、政祭、祭政、神物之典、官物也、無別神乎、人乎、民至於今、疑之、而民至於今、信之、是以王百世、而未易、所謂藏身之固者、非邪、後世有聖人、興于中國、則必取諸斯已、といへるを、本邦の神を、右の天皇のこゝろ、終ひしものやうに、たゞ、つる事、明白ならず、是、益人となり、いづらうと、の、既ハ性理の神と無心と、を破し、なら、こゝろ、又神と作すものとせし、藏身之固者といひ、聖人必取諸斯といふ、その心

よくきくふなり。もしく、本邦は外と一
しもの。祀^テ先王配^天。ぐくおの作^アりしを、い^ハて
寶祚無窮なり。聖人^ニもその人智を以^テ
是^ニ效^ヒて、百王一世の基と^モひく。うづ^ニ事^ト
れ^ハ、意味のつら^ク捧^テ後^ニも^ハと^シて^ハ
は本祖集八は
いそりひつさ
えて考
合とふし、もし^ハ、論考^ヲやうの事^トを^シて^ハな^レて^ハ
く^ハつ^ハた^ハし、大づ^クも^ハ、あ^テふ^ハつ^ハつ^ハ、
ま^ハし^ハあ^レ、と^モく^ハお^ハ似^テる^ハを^シて^ハい^ハも^ハ、佛^者
の宗門^ヲを^シて^ハ、ふ^ハは^ハ似^テる^ハ事^トを^シて^ハ祖^孫
孫^ト、ま^ハな^レつ^ハつ^ハとい^ハんと、論考^ハう^ハば^ハい^ハん^ハ、

なるさび^ハつ^ハつ^ハ、疑^ハハ^ハい^ハく^ハ、宗門^ハよ^クつ^ハて^ハま^ハさ^ハ、
その大^ニ、矣^ナかり^ハん^ハふ^ハと、あ^テる^ハご^トもの^トぞ。
獨見我國云々、與彼老聃無為自然之道相似也
は^ハも^ハも^ハ人の^ハつ^ハつ^ハ、され^ドも^ハやく^ハ所の^ハ傍^者
ふ^ハま^ハり^ハされ^タる^ハ書^ハ、う^ハご^ハあ^テり^ハて、矣^後よ^クつ^ハつ^ハの^ハ
な^ハし、論考^ハも^ハ、そ^レれ^ハ書^ヲを^シて^ハ、れ^ハの^ハづ^ク疑^ハ
あ^テけん^ハもの^トぞ、あ^テる^ハも^ハあ^テせ^ハん^ハ。
真淵動曰直く云々、我秋之道也
ふ^ハが^ハ通^ス、ま^ハを^シて^ハ、ま^ハを^シて^ハ、我^ハ秋^ハふ^ハり^ハ、ま^ハを^シて^ハ、
い^ハく^ハ矣^ナかり^ハ、本邦^ハの^ハ行^ハひ^ハも、皇神^ノの^ハ定^スる^ハま^ハり

控あつて、其^コ所^{オキテ}控よ。まゝさびまうて、私智とさうい
ひ。後^ゴほど、天下を治り治る。是^コが遠^{トホ}天皇^{スミ}の道
なり。是^コを隨^{カムナガラ}神道^{ミチ}といふなり。又天下の士庶人
ハ、その天皇の所をふたぐらうに、皆^{カミ}うごくとさうい
ひ。まろろ人、是^コ万葉集^{マンヤクシツ}の天地^{アメツチ}の神^{カミ}の時^{トキ}後^{ノチ}といふ
の、八十^{ヤソ}伴^{トモ}男^{ノヲ}ハ、大^{オホ}天^ホ又^{キミ}はまろろ人といふものと、定^サまらるる
とよめること。是^コを^テ古^コ、^ロコ^ニ、^ナナ^ハと
聖^セ人^ニ流^リハ下^カとて、上の^ウの^ノを^シと、さういふ。後^{ノチ}編^ヒ
及^ツび、つひに、天^{アメ}とさういふして、その位^イを^シ棄^スよといふ
る。さやうのさういふことをおぼゆる。所^{トコロ}ハ、風^{フウ}也^{ナリ}

えよ、是^コを万葉集^{マンヤクシツ}の神^{カミ}隨^{カミ}云^フ奉^{ホウ}せぬとよ
ま。まろろ人と、聖^セ人^ニとて、^イヤ^シとて、我^ワ狄^ジの道^{ミチ}とい
つゝいふ。まろろ人と、^イヤ^シとて、まろろ人と、其^コに^カ方の
國^{クニ}の、己^ミが^ノ制^セ度^ドの、ゆきとまろろ人の、道^{ミチ}とて、
て、我^ワ狄^ジの道^{ミチ}といふと、奉^{ホウ}聖^セ人^ニといふ、邪^ヤ智^チ私^シ言^{ゴン}
ま。たといまよはうに、まろろ人と、^イヤ^シとて、奉^{ホウ}聖^セ人^ニ
かやうの名^ナ目^メい。おのゝ己^ミが^ノ道^{ミチ}の私^シ言^{ゴン}とて、佛^{ブツ}
家^ケより、儒^{ニョウ}道^ドとも、切^キ支^シ丹^{タン}とも、お道^{ミチ}といふ。その
書^{カキ}とも、お典^{テン}といふこと。まろろ人、お皇^{ミコ}祖^ソたる
より、^ミル^トキ、^キ、^カ如^ニも、^コ子^シと、^ウの^ノとて、まろろ人

戒狄の道こしといひておどさんしとてふんふんおど
せき寺して大人タイジンをおそれおそれおどしとてふんふんおど
——く。不智是よりおどしとてふんふんおど——

又有同母為兄弟之甚矣乎其言之也

同母を兄弟とて異母をよき姉や妹とて異
母をよき婚をよきおどし。是古の道なり。まづうら
をよきとてやうよなり——。聖人の厳密とて
了通後り来て。それよあ——く——く——の
事なり。源氏物語の以やとて。嫉妬をよきとて
い。さうよとておどし。は余風跡もよき不今も有

従父トコ兄弟トコとてなり。まづいふとて。さる一日重縁といひて殊
ふ。さうとてよあ——く——く——。聖人の國ハ極悪
のまぢかある。教を厳密よきたるなり。まづ——これ
ハ。異母とて——。貴を風俗たるあなり。法候ふ
とて。己マコトノイモト己マコトノイモト妹の人の妻とてある。貴通——た
るもの。まぢよとて。本邦ハ。さやうの極悪
をよき人として。さくカミロキ正カミロキ直カミロキたる。必風あり。神皇是
とて。さうとて。さうとて。おほらふ。教をよき終ひ——
数千のちよ。君とて。人まこと以て。御玉ミタマの
正——とて。事を知る。——とて。は偏ハい——の

師とのついで。この師と、殊がよき。心喪なご
とくつひつら。儒者ども。己人よきまされんとて
の私るす。師の守りも勿偏なれど。美よなり。べ
たるいあやうな。びや。次。以此為國美事。と
いふ。ふよ。是と。玉の美事。と。さる。この。あ。ひ。さ。し。これ
ど。危。の。ご。嚴。密。よ。と。と。て。治。さ。る。よ。う。い。ふ。や。う。よ
して。よく。治。さ。る。皇。祖。の。道。よ。あ。り。ん。や。至。謂。唯。人
有。智。故。惡。禽。獸。无。智。勝。於。人。焉。云。云。こ。い。つ。と。破。せ
たる。ハ。偏。者。の。言。さ。る。も。の。こ。れ。ど。か。あ。ら。う。の。ご。ま
ふ。ま。り。ふ。あ。ら。び。聖。人。の。邪。智。を。物。と。定。る。を。破。せん

として。く。く。て。神。道。の。ま。よ。も。く。く。い。ひ。も。ご
され。く。く。夫。人。の。産。靈。の。神。の。所。魂。ふ。よ。う。て。生。物。
もの。た。れ。ば。ま。よ。と。事。さ。ら。な。り。あ。ら。う。を。天。地。よ。う
これ。を。ま。な。り。ま。ご。い。も。く。い。い。や。ご。神。道。の。意。を。保
く。く。く。び。して。偏。者。の。為。よ。老。聃。ふ。は。ど。な。ご。あ。ご
け。く。く。ふ。な。り。人。の。智。の。ま。ご。れ。たる。ハ。産。靈。の。神。の
御。靈。ふ。よ。れ。る。事。よ。て。皇。邦。の。ち。へ。聖。人。國。の。ご。く。
嚴。密。よ。と。く。れ。ど。も。お。の。づ。く。く。人。の。道。あ。ら。う
ひ。と。ふ。神。の。御。靈。ふ。よ。う。所。く。ま。と。く。く。て。ひ。と。す。ら
ま。り。く。く。い。ひ。も。か。や。う。の。所。ま。園。う。の。ま。い。ひ。い。ひ

安万侶之記古事云云 豈不大罪矣乎
これらの事と。恩させりしりくつと。いとを
たれ。いみしき。老あはくふ相傳てこそあれど。
あつと。三韓蕃臣となりて。王仁と貞せしり。
あふふまをせり用ひらる。りし王仁まわらば。ふ
くして。ふいど。い。り。あ。ま。ま。も。後。も。も。作。ら
ま。新戲本と作るよりも。安もりなむ。
又漢文字あはく。り。あ。ま。ま。も。い。み。じ。り。し
右の大御代の。業のまをりしり。なれど。
孔丘もりして。り。あ。ま。ま。も。今。ま。れ

ても。唐人の千人二千人の。小國の大名の勢も
も。り。あ。ま。ま。も。今。ま。れ。天。竺。梵
字。阿。茶。院。の。横。又。字。も。り。あ。ま。ま。も。今。ま。れ。ど。
い。づ。れ。も。も。た。り。あ。ま。ま。も。今。ま。れ。ど。
義。も。あ。り。今。ま。ま。も。今。ま。れ。ど。
母。た。り。あ。ま。ま。も。今。ま。れ。ど。
又。字。な。り。あ。ま。ま。も。今。ま。れ。ど。
漢。又。字。な。り。あ。ま。ま。も。今。ま。れ。ど。
字。も。あ。り。司。馬。選。が。作。り。し。王。義。之。が。作。り。し。
とも。天。竺。阿。茶。院。よ。り。あ。ま。ま。も。今。ま。れ。ど。

ん。それやがごとく、漢文字かきとどれりてい
りし。世にわづらひ、著述して行事とついでんや。
まこと紐とてづのたといハ、傷者どもの上ふり
さむりし縁と食むふ、便利よきと文字と作りて
置し。秦王や、李斯やを、その文字として、又
章と作りてとくする。傷者ども以合ざる。不我理
かりとや。

夫真淵頗讀聖人之書云々不亦豪傑之
士哉

かみよは惜乎其不能潛心於聖人之道とい

かづりし。今うくいつる。いづくも真淵翁と云々
門より出し人々をばし。とらるる。あつれども。
漢籍のちりしむて、皇邦の古書ハ解し。がこと事。
かみよといふ。いづれに。いんもせん。こなし。

抑生其國必為斯國揚美云云

かやうといつれど。いふ後園流の学者ハ、あつれども。
本國と述し。あかるんぞ。茂卿ハ、いづりし。ふ夷と
稱し。純ハ、天皇の御系系たる神代紀と、俗從
のこなど。あつれども。あつれども。いづれに。
せむ書の中ふり。忌憚なき。いづれに。いづれに。奉て

かきくごう。唐ふりし君子のふつらりしのふや。
既よは編者ふじし。常々よ。西蕃と華夏と称す。
是皇國と夫とをるなり。あまうし我皇部の割交
とありん。國史の筆法とありん。これられこ
とん。非時文摘紙よ妻しく編年しこればこ
小いん。おけ編りし。本書よいん。これられこ
なほありし。事さげとて。是よりて。子
このゆり。文化と年九月廿日お焼下小これとこ。
くぬりとの編る

非時文摘紙

嗣出

下の小印と国本紙かして
保考箱の舊紙と見えたり



文化三年丙寅冬霜月

浪華書肆

尾陽書肆

心齋橋通南本町

河内屋儀 助

名護屋玉屋町

永樂屋東四郎

五錢代濟
初年

三至九月廿九日書格本堂之得

